齋藤君は12階建てマンションの7階に住んでいます。今日は月曜日で、一人で学校に行く日です。行ってきまーす、とあいさつして、エレベーターを待ちました。

齋藤君は、今日はちょっとした冒険をしてみたいと思い、いつもと違うことをすることに決めました。いつもどおり一階に直行するのではなく、でたらめなボタンを押して、たまたま当たった階で降りてみようと思いました。齋藤君はエレベーターに乗り込むと目をつぶって、4つくらいのボタンをランダムに選び、思いっきり連打しました。すると、エレベーターがビー、ビー、ビー、という変な音を出しました。そして、エレベーターはガコンという大きく響く音をたてると、勢いよく急に上昇しました。斎藤君は、怖いと思いました。エレベーターはグォーという轟音を立てながら、どんどん上へと昇っていきます。

やがて音が小さくなり、エレベーターはゆっくりと停止します。そして、チーンと鐘がなるような音がして、ドアが開きました。

齋藤君がおそるおそる外に出ると、そこには最上階の景色ではなく、なぜか一階の景色が広がっていました。おかしいな、と思い後ろを振り返りましたが、エレベーターのドアはすでに閉まり、エレベ

ーターは別の階に行ってしまったようでした。

齋藤君は、とても不気味な気持ちがして、早く学校に行き友達に会いたいと思いました。おかしい点はあるものの、一階にいるみたいなので、マンションの玄関から外に出て、いつもの通学路を通り、学校へ行きました。

学校の自分のクラスのとびらを開けると、おかしなことが起こりました。教室には友達はおらず、知らない顔ばかりでした。齋藤君は教室を間違えたと思い、教室の掲示を確認しましたが、間違いなく自分のクラスです。そもそも、毎日このクラスに通っていますので、そうそう教室を間違えるはずもありません。齋藤君は、もしかしたら、エレベーターがいつもの世界とは違う世界に連れてきてしまったのかもしれないと思いました。

教室の掲示が正しいことを確認して、もう一度とびらを開けて教室に入ると、自分の席はいつもの場所に確かにありました。齋藤君はとても緊張して座りました。すると、となりの席の子が「齋藤君、おはよう！」とあいさつしてきました。齋藤君は知らない人に急に名前を呼ばれたので、びくっと驚きました。でも、あいさつは返そ

うと思い、「おはよう」とあいさつを返しました。

そうこうしているうちに、朝の会が始まる時間になり、先生が入ってきました。先生は、いつもの先生なので、ほっとしました。そして、先生が「これから朝の会をはじめます。」と言いました。齋藤君はいつも通り、礼をしようとしました。ところが、先生や、周りの子は机に手を置いてがたがたと机をゆらしています。何だろう、と思って見ていると、となりの子に、「齋藤君もやってよ！」と厳しい口調で叱られました。なぜこんなことをするのか全く分かりませんが、口調がとても怖かったので、言われたとおりに真似して机をゆらしてみました。一分ぐらいすると、先生が「やめ！」と言い、みんなは机をゆらすのをやめ、普通に朝の会が始まりました。元の世界に帰りたいと思いつつも、どうやって帰ればいいのかわかりませんでした。

休み時間に先生にこの謎の儀式について質問すると、「呪いの神様に言われていることを忘れたの？」と先生はいいました。先生の説明によると、この学校には呪いの神様がとりついているので、呪いの神様の言うとおりにしないと大変な不幸がおきるということでした。

そして、この学校には始まりのあいさつだけでなく、落とした鉛筆を拾うとき、手を洗うとき、給食を食べるときなど、いろいろな場面で、呪いの神様が決めたルールを守らないといけないということが分かりました。しかし、齋藤君は神様が何者なのか理解できませんでした。

呪いの神様は、体育館の横にある小さな祠にまつられているということでした。そして、神様の前で祈る時間があり、すべてのクラスが交代で祈りに来ていました。二時間目は、齋藤君らのクラスが祈る番でした。祠には紫色の布がかぶせられていました。齋藤君は、わけの分からない神様のために、みんながなんでこんなことをしないといけないのかと思いました。そこで、祠を倒そうと思い、思い切って祠にかぶせられた布を取り払ってみることにしました。齋藤君は祠に向かって走っていき、勢いよく布をめくり上げました。

布をめくると、そこには空っぽの箱しかありませんでした。しかし、布をめくったと同時に、祈っていたクラスのみんなが動かなくなりました。クラスのみんなは自分にいたずらをしているのかと思い、力ずくで動かそうとしましたが、石のように重く動きませんで

した。齋藤君はもうこれ以上学校にいるのをやめて家に帰ろうとしましたが、校門は閉まっています。校門の鍵は固く締められており、校門をよじ登ろうとして近づくと、なぜかその門は高層ビルよりも高くなってしまいました。齋藤君は、この不気味な学校に死ぬまで閉じ込められるのかと焦りました。

齋藤君は疲れたので、中庭にある切り株に座って休むことにしました。すると、どこからともなくブクブクブクと気持ち悪い音が聞こえてきました。空耳かとも思いましたが、はっきりと聞こえます。そして、黒いあぶくが体の中から湧き上がってきて、飲み込まれてしまうような、不思議な感覚がしました。齋藤君は、これが呪いなのかと思い、逃げようと思いましたが、どこへ逃げたらよいのか、何をしたら良いのか分かりませんでした。それどころか、体を動かそうとしても、体が動かなくなりました。昼間なのに、視界がどんどんと暗くなっていきました。

そんなとき、自分の手が誰かに引っ張り上げられました。自分を取り巻いていた目に見えない黒いあぶくは、身体からころころ転げ

落ちるように、流れおちていったようです。自分を引っ張り上げてくれたのは、見たことのある人、校長先生でした。校長先生は、「君はここで何をしているのかね？友達を助けて家に帰りなさい。」と言いました。そして校長先生は続けて言いました。「人間の手には人を助ける特別な力があるんだよ。君にもできるはず。」そこで、齋藤君は石のように固まったクラスメイトたちがいる祠のある体育館横へもう一度行きました。

校長先生と同じように、その人たちの手をぎゅっと握り、一緒に立ち上がるように引っ張り上げると、あれほどがっちりと固まり、動かなかった子たちが力強く立ち上がりました。一人ひとり、手を握った人たちから感じる力は違っていました。手を握ってみると、誰も知らないと思っていたクラスメイトたちは、実は自分が知っている人だということが分かりました。目をつぶって手を握ると、この子の手は北村君の手で、この子の手は山中君の手で、この子の手は西口さんの手だという風に、姿や声は違っても、自分が普段から知っている本当のクラスメイトであることが分かりました。齋藤君は、これまで手を握ったことのない子の手でも、誰の手であるか分かってしまうので、とても不思議な気持ちになりました。

そして、クラスメイト全員を動けるように助け終えると、この世界のクラスメイトは、呪いの神様を退治してくれたことに感謝しました。齋藤君はただ、かぶされた布をとっただけですが、みんなが呪いの神様から解放されるためには、それだけで十分であったようです。クラスメイトたちが校門の前で見送ると、校門はひとりでに開きました。齋藤君は校門から外に出て、みんなにもう一度手を振ろうと後ろを振り返ると、みんなはいなくなってしまっていました。その代わりに、いつもと同じ現実の学校がそこにあり、いつもの友達がいつもの姿で、齋藤君に手を振っていました。